東海大学紀要情報通信学部
vol.7,No1,2014,pp.17-22

トピックス

情報通信学部における劇場体験実習の教育的効果について —体育自己形成科目「フィットネス 2（ダンス）」の実践例—

村松 香織[*1]，渡辺 佑典[*2]

Educational effects of the hands-on theater training practiced in Fitness 2 (Dance), an elective physical education course at Takanawa Campus

by

Kaori MURAMATSU[*1] and Yusuke WATANABE[*2]

(received on May 26, 2014 & accepted on July 15, 2014)

Abstract

The aim of this research is to study the educational effects of the hands-on theater training practiced in Fitness 2, an optional physical education course at the Takanawa Campus, and to obtain basic data for the future development of public achievement-oriented general education programs suitable for the students of the School of Information and Telecommunication Engineering. A questionnaire survey of 20 students (15 men and 5 women) who participated in the hands-on theater training course for the 2013 fall semester, which was conducted at the end of the course, revealed the following results:

1) In general, students were satisfied with the amount of time required for the course, the theater chosen for the course, as well as the training content, and had favorable impressions of the hands-on theater training. At the same time, however, the survey showed that students are not familiar with theater in their lives.

2) Approximately 80% of the students participating in the course were willing to participate in theater events in the future. The creation of a teaching system that forms part of the general education program and that can meet their future needs would be desirable.

3) In their free comments, many students wrote about their recognition of the hands-on theater training as a valuable experience, the actual effects of watching theater performances, and their impressions about the hands-on theater training course. Students expressed interest in educational programs similar to this course. This form of education is considered to have significant educational effects.

4) The survey results show that hands-on theater training has the possibility of drawing out students' own creativity and communication skills and of increasing their satisfaction with education. The results suggest the positive effects of public achievement-oriented education, which may be developed for the university as a whole in the near future.

Keywords: *The hands-on theater training, Educational effects, Fitness2 (Dance) class*
キーワード:劇場体験実習,教育的効果,科目「フィットネス 2（ダンス）」

1. 諸言

2008年に東海大学情報通信学部が発足した当初,高輪キャンパスにおける体育教育は一年次における必修授業（合計2単位：「フィットネス理論実習」1単位および「スポーツ理論実習」1単位）を主としており,初年次教育として担う役割が大きかった.その後,学生数や学年の増加と共に2010年度からは必修科目の開講のみならず,体育関連の選択科目（自己形成科目）が設定され始めた.そして学部発足から4年が経過した2013年度には,通年で開講された必修科目は2科目30コマ,自己形成科目（選択科目）は9科目22コマとなり[1)],発足直後と比較すると学生への体育科目提供の充実が行われてきた.昨年度行われた体育授業に関する調査の結果,総じて自己形成科目の履修学生は２,３年次生が多く,初年次教育として開講される必修科目とは到達目標や学生からのニーズ等が異なってきていることが明らかとなった[2)].

そこで自己形成科目においては,必修の体育授業が修了した2年次以降の学生に対しても,東海大学体育科目全体としての学習目標（「健康・体力の保持増進を図るための能力を養う」「スポーツ等の活動を通して好ましい人間関係や社会的な行動を認識させる」「心身を健康で豊かにする」など[1)]）の実践を通じて更なる教養教育の充実を行っていくことが今後望まれると考えられる.特に近年は,大学の大衆化・ユニバーサル化による入学者の層の変化や家庭環境の変化等[3)]に対応する必要が大きくなってきている.そこで必修科目だけでなく学生自らが選択できる自己形成

*1 高輪教養教育センター 准教授
School of Information and Telecommunication Engineering, Liberal Arts Education Center, Takanawa Campus, Associate Professor
*2 情報通信学部 通信ネットワーク工学科
School of Information and Telecommunication Engineering, Department of Communication and Network Engineering

科目の中で,それぞれの科目の特徴の下,多様化する学生特性や資質[4]といったものに対応できる教育体制を構築していくことが不可欠であろう.

従来高輪教養教育センターでは,個々の科目という分野にとどまらず,情報通信学部という学部や学生の特性を生かした人間教育（人間力育成）が目標となっている[5].東海大学型リベラルアーツ教育における文理融合の思想（学生が専門的な学問分野に偏らず,より広範な視野で知的洞察力や想像力を働かせ,柔軟に対応すべき課題に挑む知的センスを養うことを期し,学生一人一人の教養的資質の向上を図ること[5,6]）や従来の知識重視型能力（IQ的能力）よりも,様々な分野の融合で養うことのできるEQ的能力（＝Emotional Intelligence Quotient:心の知能指数）が一般社会において求められる傾向が高い[7]ことを考慮した上で,社会環境の多様化への対応と共に柔軟な自己形成科目の授業を展開していく必要があると考えられる.

現在東海大学では「大学共通教養科目の改革」を教育改革計画の中心に据え,理論と実践を融合した「パブリック・アチーブメント型教育（＝若者が社会活動を通じて民主社会における市民性を獲得していく実践,組織や学習プログラム）」を取り入れた全学的なカリキュラム改革と組織改革を実行し[8],全国的な共通課題を解決する人材の育成を目標としている[9].

以上より,現在の東海大学の「パブリック・アチーブメント型」教育の思想や,高輪教養教育センターの人間力育成の教育目標を考慮すると,その教育段階として,学生には“自らの討論や参加によってイシューを体験的に学ぶ場を提供する必要[10]”があるといえる.そこで,2013年度秋セメスターに開講した体育自己形成科目「フィットネス2（ダンス）」において,学生の自主的な活動の下に劇場体験実習を行った.この企画では学生自らが主体的に参加や討議を行い,企画を進行していった.劇場体験実習の終了時には学生を対象に体験実習に関する質問紙調査を行った.今回の体験実習の教育的効果（学内授業と劇場体験を結びつけることによって,どのように授業効果が変化するか）について明らかにし,今後の情報通信学部生にふさわしい「パブリック・アチーブメント型」教養教育の構築に活かせるような基礎資料を得ることを目的とした.

2. 方法

2.1 調査方法

2013 年度情報通信学部（高輪校舎）において「フィットネス 2（ダンス）」を受講した学生を対象に劇場体験実習を企画し,劇場実習終了後に質問紙調査を実施した.参加者 20 名中 100%の有効回答を得た.なお,調査は集合調査法で行った.

2.2 質問項目

今回使用した「劇場体験実習調査アンケート」の質問項目は,これまでに教養科目授業関連で使用した質問紙調査項目を基準に設定を行った（「2005年度総合教育科目アンケート」[4]および「2013年度健康・フィットネス理論実習自己評価アンケート」[2]）.学生にはあらかじめ質問紙調査実施の研究目的（体験実習の教育的効果の調査および「パブリック・アチーブメント型」教養教育のための資料収集）を説明し,承諾をとった上で記述をさせた.具体的な内容,質問項目は以下の通りとし,（Q12および13）は自由記述とした.

（Q1）性別
（Q2）学年
（Q3）運動・ダンス・音楽・パフォーマンス歴等について
（Q4）今までに実際に劇場でミュージカルやダンスパフォーマンスなどを観たことがありましたか？
（Q5）体験実習の所要時間について
（Q6）開催した時間帯について
（Q7）体験実習の内容に関する満足度について
（Q8）開催会場について
（Q9）通常,パフォーマンスは何で観ますか？
（Q10）今後,機会があれば公演を観に行きたいと思いますか？
（Q11）今後このようなイベントが実施された場合,参加したいと思いますか?
（Q12）今回の実習に参加して感じたことを書いて下さい.
（Q13）劇場体験実習企画への要望等があれば書いて下さい.

2.3 手続きおよび分析

2013 年度秋セメスターの第 13 回授業時（2013 年 12 月 17 日 4 時限目）に質問紙調査を実施し,マイクロソフト・エクセル 2010 を使用して単純集計を行った.

2.4 劇場体験実習に関する補足説明

2013 年 12 月 10 日 17:00～21:30 に劇場体験実習（学外授業）として,港区電通四季劇場においてミュージカル作品「ウィキッド」を観劇した（Fig.1 参照).それまでの学生の活動状況等は以下の通りである.

１）2013 年 10 月：
主に「フィットネス２」および「ダンス理論実習 A」の受講生の中から「劇場体験実習」に参加を希望する学生を募集し,22 名を決定した.

２）2013 年 11 月：
学生が主体的に下調べや企画を行い,参加学生全員の意見を重要視して,上演作品,劇場,日程,座席を決定した.

３）2013 年 12 月：
12 月 10 日に「劇場体験実習」を実施した.学生 20 名（欠席 2 名）および教員 1 名が参加した.
実習後の授業時において,「劇場体験実習調査アンケート」を行い回収した.課題として「体験実習のレポート」を作成させた.

４）学内における事前学習について

10～12 月は劇場体験実習の企画を進めると同時にパフォーミングアーツの歴史,脚本,作品の内容と構成,劇場の仕組み,作品鑑賞方法について事前学習を行ってレポート等を作成させた.また.ダンス実技の中では,表現に関する動きのトレーニングを行った.

５）観劇用チケット代金について

劇場体験実習の実施においては,その参加において観劇用チケット代金や交通費が不可欠となる.今回は「東海大学 2013 年度学部用研究補助金個別計画」において本研究に補助を受けることができたため,学生への負担を軽減することができた.



Fig.1 Broadway musical, “Wicked” by Shiki theater company

3. 結果および考察

3.1 参加学生の基本情報

設問（Q1：性別,Q2：学年）の結果,参加学生は男子 75%（15 名）,女子 25%（5 名）であった.本学の例年の傾向ではあるが,男子学生においてもダンスの授業に対する関心はまずまずといえる.学年は 1 年生：10 名,2 年生：9 名,3 年生：0 名,4 年生：1 名であった.

3.2 運動・ダンス等の経験について

設問（Q3：運動・ダンス・音楽・パフォーマンス等の経験について）の結果より,サッカー,卓球,バスケットボール,水泳,テニス,空手などのスポーツ,武道種目に加えてダンス,ピアノ,軽音楽等のパフォーマンス系の経験者がいることがわかった（経験年数：平均 6.07 年）.今回の参加学生は特定の種目経験に偏ることはなく,様々な運動やパフォーマンス経験を持った集団であることが分かった.運動・ダンスパフォーマンス等の経験のない者は 2 名であった.

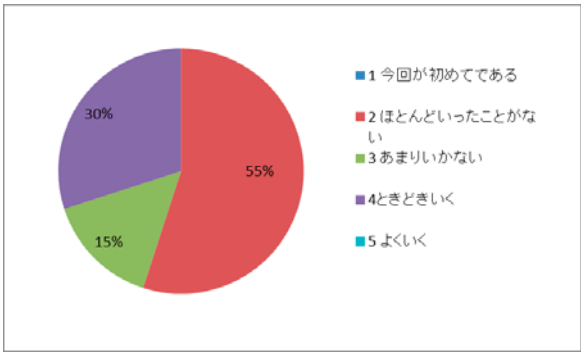

Fig.2 Student’s theater experience (dance, musical and other performances)

3.3 劇場経験について

設問 4（今までに実際に劇場でミュージカルやダンスパフォーマンスなどを観たことがありましたか？）の結果を Fig.2 に示した.

「ほとんどいったことがない」と回答した学生が最も多く約半数の 55%（11 名）であった.続いて「ときどきいく」が 30%（6 名）,「あまりいかない」が 15%（3 名）であった.頻繁に劇場へ通う者や,逆に全くの観劇初心者はいなかった.

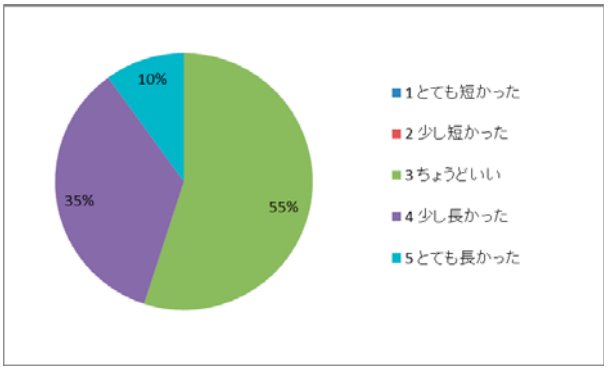

Fig.3 The amount of time required for the course

3.4 体験実習の所要時間について

設問 5（体験実習の所要時間について）の結果を Fig.3 に示した.「ちょうどよい」と回答した者は約半数の 55%（11 名）であった.「少し長かった」と回答した者は 35%（7 名）,「とても長かった」と回答した者は 10%（2 名）であった.ミュージカル観劇に終始興味深く参加できたのは半数程度であった可能性があると考えられる.

3.5 開催した時間帯について

設問 6（開催した時間帯について）の結果を Fig.4 に示した.「どちらともいえない」と回答した者は 45%（9 名）であった.「少しよかった」と回答した者は 25%（5 名）,「少し良くなかった」と回答した者は 30%（6 名）であった.今回は学生にとって,ほぼ常識的な時間帯に体験実習を開催することができたと考えられる.

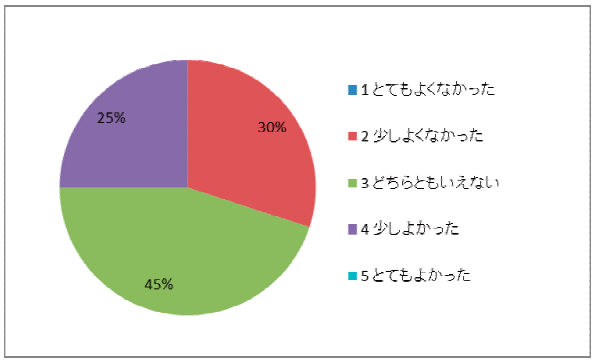

Fig.4 The course starting time

3.6　体験実習の内容に関する満足度について

設問 7（体験実習の内容に関する満足度について）の結果を Fig.5 に示した.「とてもよかった」と回答した者が 50%（10 名）,「少しよかった」と回答した者が 30%(6 名)であった.「どちらともいえない」と回答した者が 10%(2 名)であった.少数ながら「少しよくなかった」回答した者もいたが,概して参加学生は今回の体験実習内容（公演内容も含め）に満足していたと考えられる.

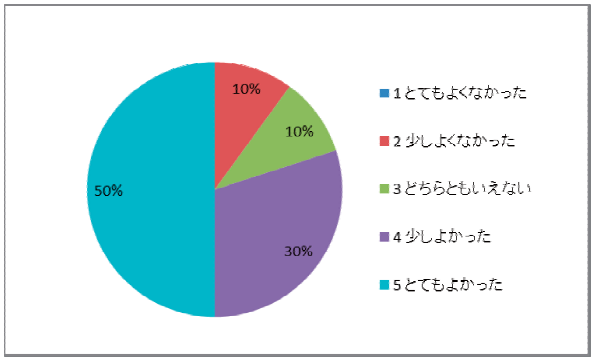

Fig.5 Students’ satisfaction with the training content and a musical performance

3.7　開催会場について

設問 8（開催会場について）の結果を Fig.6 に示した.「少しよかった」と回答した者が 75%（15 名）と最も多く,「とてもよかった」と回答した者が 25%（5 名）であった.開催した電通四季劇場に関しては参加学生全員が満足していたことが分かった.

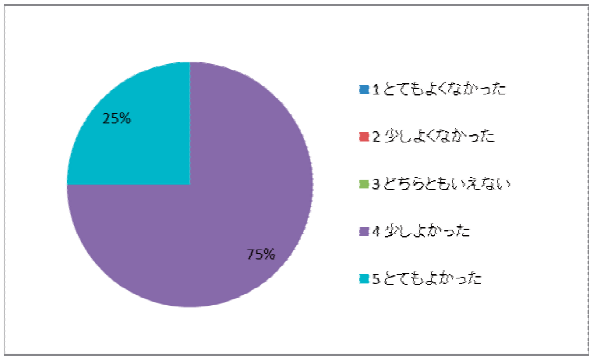

Fig.6 Students’ satisfaction with Dentsu-Shiki Theater

3.8　パフォーマンスを観る媒体について

設問 9（通常,パフォーマンスは何で観ますか？）の結果を Fig.7 に示した.「テレビ」と回答した者が 55%（11 名）の約半数で,次に「インターネット」と回答した者が 25%(5 名)であった.「普段は観ない」という学生は 15%（3 名）であった.劇場は学生にとって身近な存在ではないことが示された.

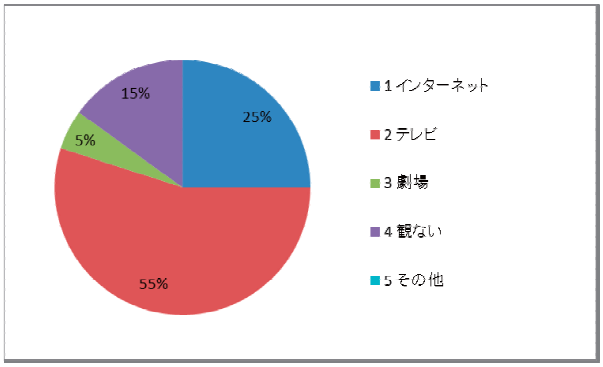

Fig.7　Useful media for watching performances

3.9　今後における観劇への意識について

設問 10(今後,機会があれば公演を観に行きたいと思いますか？）の結果を Fig. 8　に示した.「とても思う」,「少し思う」と回答した者が同数でそれぞれ 35%（7 名）であった.つまり,今後機会があればまた劇場でパフォーマンスを観たいと感じている者が,全体の約 7 割いることがわかった.「どちらともいえない」（20%：4 名）や,少数ながら「あまり思わない」（10%：2 名）との回答者もいた.

総じて,今回の劇場体験実習でのパフォーマンス観劇は学生にとって,将来の観劇やパフォーマンスへの好印象を持たせることができ,メンタル的にはポジティブな学習経験であったと考えられる.

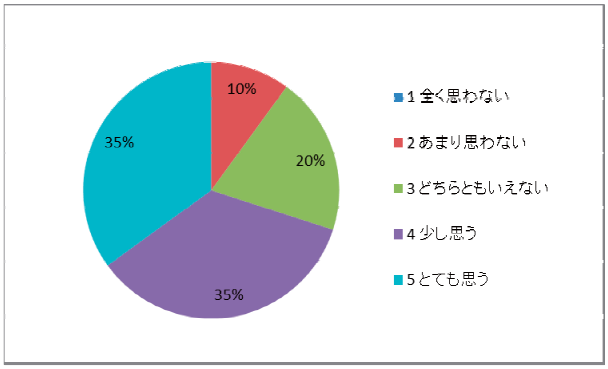

Fig.8 Students’ interest in going the theater again

3.10　今後における観劇イベントへの参加意識について

設問 11（今後このようなイベントが実施された場合,参加したいと思いますか?)の結果を Fig. 9 に示した.「少し思う」と回答した者が 70%（14 名）,「とても思う」と回答した者が 10%（2 名）であった.設問 10 の結果とほぼ同様に,今後機会があればまた今回のような観劇イベントに参加したい,と観劇イベン

トへ対する参加意欲を示している者が全体の約 8 割いることがわかった.今後は,教養教育の一環として,このポジティブな観劇イベントへの参加意欲に対応できるような授業システムを構築する必要があるかもしれない.

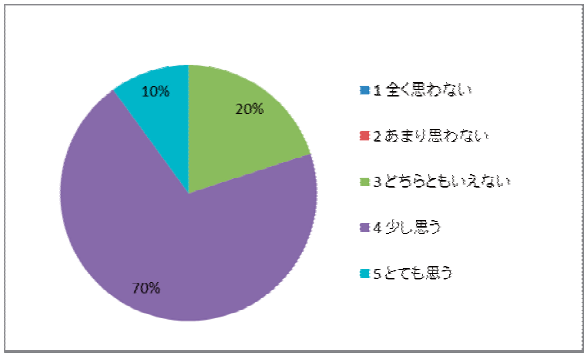

Fig.9 Students' interest in participating in theater events in the future

3.11 劇場体験実習に参加した感想について

自由記述の設問（Q12：今回の実習に参加して感じたことを書いて下さい.）で得られた回答は以下の通りであった（カッコ内は件数）.

①劇場体験実習の良い経験としての認識について（9 件）

・今回の劇場体験実習は良い経験であった.
・ミュージカル観劇は行きたくても自分だけでは行けないので良い機会だった.
・劇団四季のミュージカルを観たのは 2 回目だったが,とてもおもしろくて感激した.
・普段の生活ではミュージカルを観る機会がないのでとても良い体験であった.
・このようなイベントがあったらまた参加したい.
・次の機会がないのが残念である.
・個人でも観劇に行ってみたい.

②実際の劇場における観劇効果の実感について（7 件）

・テレビや動画などを通して間接的にパフォーマンスを観た場合とは,全く異なる迫力を感じることができた.
・観ているうちに「劇場ってこんなに楽しい場所なのだ」そして「また来たい」と感じるように変わった.
・今回皆で選定したミュージカルは質が良く,とても感激することができた.
・歌や踊りのレベルが高く,良いパフォーマンスを身近で実際に観ることができて勉強になった.
・ストーリーや演出・構成がとても工夫されていることを実感した.

③劇場体験実習の授業形態について（5 件）

・普段は狭い高輪キャンパス学内での授業だけなので,学外授業として劇場へ移動したのが新鮮であった.
・企画がスケジュール通りに進行してよかった.

④チケット購入について（1 件）

・大学の研究の一環として参加したために,チケット購入に関しての金銭的な心配が必要なく,心強かった.

以上は,総じて今回の実習のプラス面に関する感想が多かったが,その中で最も顕著であった内容は 9 件の回答が得られた①「劇場体験実習の良い経験としての認識について」であった.加えて「またの機会があれば参加したい」という劇場体験実習へ対するポジティブな感想が①回答者の全員から得られた.さらに,「自分一人では観劇に行きづらい」「次の機会が設定されていないことへの不満」や,「次回は自主的に観劇に行きたい」などの意見も含まれていた.

次に多かった感想は,7 件の②「実際の劇場における観劇効果の実感について」であった.「動画など間接的にパフォーマンスを観た場合と全く異なる迫力の実感」「良いパフォーマンスを身近で実際に観ることによる勉強」「ストーリーや演出・構成等の工夫への実感」「観劇に伴って“劇場ってこんなに楽しい場所なのだ”“また来たい”という気持ちの出現や変化」などであった.学内授業でのストーリー,劇場・舞台の仕組み,表現を伴う動きの意味等の理論学習や動画映像,ダンス実技などからでは得づらい感覚の理解,つまり実際の劇場でのみ受け取ることができる「観客と演者の共感」や「劇場としての一体感」によって,学生たちはパフォーマンス全体から感銘を受けることができたと推測される.

続いて 5 件の③「劇場体験実習の授業形態に関する感想」では,「学外授業の新鮮さ」「皆で劇場体験実習の企画を遂行することに対する楽しみや緊張」などについて述べられていた.今回の学生による自主的な実習企画では,学生自身が企画進行に対する責任感を予想以上に感じていたことがわかった.このことより,今回の劇場実習企画の様に通常の学内授業以外の授業形態にも,学生たちは大いに興味関心を持ち,総合的な教育効果を奏する可能性があると推測される.

その他,少数ながら④「チケット購入について（金銭的負担の不安）」の記載も見られた.学生の年代にとって,（一般的に好評なパフォーマンスの）公演チケットの価格は高価という認識を持たざるを得ないだろう.

3.12 劇場体験実習企画への要望について

自由記述の設問（Q13：劇場体験実習企画への要望等があれば書いて下さい.）で得られた回答は,今後の劇場体験実習企画実施を希望する記載（「同じような劇場体験実習企画があったら参加したい.」「2,3 回劇場体験実習企画があったらよかった.」など計 10 件）であった.参加者の約半数が,自由記述で次回の劇場体験実習企画を希望していることから,次年度以降の授業でも今回のような体験実習を取り入れた授業システムの構築が行えるとよいと考えられる.

4. 討議

近年,パフォーマンス芸術等の文化芸術の分野の発展と共に,「もの」から「こころ」の豊かさに関心が高まってきている傾向がみられる[11]．また,東海大学体育科目の目標である「心と身体の豊かさ」のためには,上からではなく下から盛り上がる「公共的」な仕事の展開[12]が不可欠であると考えられる.今回の劇場体験実習においては,実際に劇場へ訪れるまでの企画や準備等を行うにあたって,学生が主体的に参加をした.その結果,学内で学ぶ実技や理論の修学レベルを超えて,学生の自主性や協調性などを養う等の人間力の育成につながり,今回の体験実習は参加学生にとって満足度の高い回答としてアンケート調査結果に反映されたと考えられる.さらにこの満足度によって,次回の劇場体験実習実施の要望が,学生自らから提案されたのであろう.

このように学生元来の資質・特性をより自然な形で生かすような教養授業の延長線に東海大学「パブリック・アチーブメント型」教育が展開されていくことが望ましいと推測される.また現状において,それぞれの自治体においては,次世代の担い手であり活動力の高い大学生の共同参加やボランティアが望まれており[12],大学教育と地域社会への良い形での融合の中[13],何ができるかを慎重に模索する必要があると考えられる.

以上より,劇場体験実習では学生の自主性やコミュニケーション力を引き出して満足度を高める可能性があることが示された.今回の調査結果から,情報通信学部においても近い将来展開され得る「パブリック・アチーブメント型」教育の有効性が推測される.

5. まとめ

本研究では,情報通信学部高輪キャンパスの体育選択科目（自己形成科目）「フィットネス2（ダンス）」において実施した「劇場体験実習」（学外授業・学生の自主的な活動を伴う）の教育的効果について明らかにし,今後の本学部生にふさわしい「パブリック・アチーブメント型」教養教育の構築に活かせるような基礎資料を得ることを目的とした.2013年度秋セメスターの劇場体験実習終了時に参加学生20名（男子：15名,女子：5名）を対象に質問紙調査を行った結果,以下のことが得られた.

１）総じて学生は実習所要時間,開催劇場,体験実習内容等について満足し,今回の劇場体験実習に対して好印象を持っていた.一方で,普段の生活において劇場は学生にとって身近な存在ではないことが示された.

２）参加学生の約 8 割が今後における観劇イベントへの参加意欲を示した.将来的に教養教育の一環として,この要望に対応できるような授業システムを構築できるとよいと考えられる.

３）自由記述式感想では,「劇場体験実習の良い経験としての認識」「実際の劇場における観劇効果の実感」「劇場体験実習という授業形態に関する感想」が多かった.今回の劇場実習企画の様な授業形態に学生たちは興味関心を持ち,総合的な教育効果を奏する可能性があると推測される.

４）劇場体験実習では,学生の自主性やコミュニケーション力を引き出して満足度を高める可能性があることが示された.東海大学全体として,近い将来展開され得る「パブリック・アチーブメント型」教育の有効性が推測される.

本研究の遂行において学校法人東海大学 2013 年度学部等研究教育補助金個別計画（「パフォーマンス芸術に触れる劇場体験実習の企画」）より一部補助を受けている.

参考文献

1) 授業要覧　2013　学部学科編　情報通信学部，東海大学，pp33，2013.
2) 村松香織ほか：必修科目「健康・フィットネス理論実習」の点検 - 東海大学情報通信学部生の体育科目における自己評価 - ，東海大学紀要情報通信学部，Vol.6，No.2，pp45-51，2013.
3) 松本秀夫ほか：東海大学生の生活習慣とメンタルヘルスに関する実態調査，東海大学紀要体育学部，pp165-171，2010.
4) 村松香織：短期大学高輪校舎における人間教育のあり方について,-総合教育科目「人間の心」の授業再評価とその展望- 東海大学短期大学部紀要，第40号，pp33-41，2006.
5) 福崎稔ほか：短期大学高輪校舎における人間教育を目指した総合教育の新しい取り組み，東海大学短期大学部紀要，第39号，pp31-37，2005.
6) 元田州彦：文理融合科目の概念と展望―現代文明論科目における新しい教養教育の挑戦―，東海大学総合教養センター紀要，第23号，pp69-77，2003.
7)和田秀樹:大人のための勉強法，PHP新書，pp44-75，2005.
8) 東海大学学長室To-collabo推進準備室：To-collabo通信，Vol.1，2013.
9) 東海大学学長室To-collabo推進準備室：To-collabo通信，Vol.3，2014.
10) 東海大学学長企画課To-collabo推進準備室：To-collaboプログラム成果報告書2013，pp21-24，2014.
11) 文化庁長官官房政策課：文化ボランティア通信，Vol.1，pp1-4，2002.
12)文化庁長官官房政策課:文化ボランティア通信，Vol.10，pp1-21，2004.
13) 永井聡子：地域の劇場モデルに関する考察 - 市民参加の可能性について - ，静岡文化芸術大学研究紀要，Vol.12，pp67-71，2011.